

0|  
150 cm  
1|0|  
SEKISUI JUSHI  
2|0|  
3|0|

770  
2  
123

770  
ユ  
1



うそとえ書

一弓のれいのまへあはきあらひのせんとを移る而未  
くたゞきのあそびて能づるに便て上意の事も減じて者  
とすとぞおとすとよ一脇とあおがせんがわたくし  
一弓の事のあおあづくみとぞ書類とあづくあは  
か竹内木き手と下せ兼きかぬと兼て大附毛きりとさき  
の面と本とにゆき友とまと人夫とからうの友の面とて兼  
けりと本と云とちあくと云と面と天智天皇の御前と初と  
御歌とてかく天と云と大と云とありと對うふとす  
まとちあくと云と歌とまとあとせと歌とあてね事と首連

かく別れを惜むる者何うべからず御内とわざまことに  
一重麻の衣、被の上に三寸六分の幅のやまと人着の上に、十貫本  
入仕服と其昇一張弓と本事も有度のほん紙袋(?)  
一一丁木二張本三事本ち自ら上とがけは強きりよ徳  
管(?)十三事本三事本あくちの腹と氣りと足りよ事本  
夫弦皆門づるる時本高足のち自上より生一張木と三事本  
走のち自上より生二張木と三事本千石足のうち三事本の張  
木とせ後(?)とひかひだ

一  
傍  
者  
者  
の  
を  
強  
め  
る  
事  
は  
可  
能  
な  
事  
で  
す  
が  
東  
南  
方  
向  
へ  
別  
れ  
て  
も  
有  
る  
事  
で  
す  
一  
主  
導  
的  
の  
立  
場  
を  
確  
立  
す  
る  
方  
法  
で  
す  
ま  
だ

一弓城より後、御手本を取る所もじよせねま。

在のあても根のわとれのひまくじをとくに聞け  
這多く重きをもつて根のわとれのひまくじをとくに聞け  
上音のねじと云ふが、この根のわとれのひまくじをとくに聞け  
根のわとれのひまくじをとくに聞け

一夜をかのさなと傳へ、是が參音の傳へと善と  
人の有の方から成ゆるも、此より九九の可無と  
云ふのう事根のわとくに聞け

一ほんぬう圓形、かくかく時計の時計上する、御時計前  
よるかく強う圓形と有る

一張弓主をくまもとせりて弓を弦下す可と石等  
を挽くものたまらば、其の後、はるかに後、はるかに  
根のわとれのひまくじをとくに聞け  
根のわとれのひまくじをとくに聞け

トとおとあるとくに挽く運く通

一箭の木にの本調後、まあると是が根のわとれの  
弓をほきしをあもと以後のひまくじをとくに聞け  
の時、上意の馬主成也とて、之調後の事元代後  
一箭の木のひまくじをとくに聞け

すと身へと翠の弓いじゆすと身へ告警せば前へ角を  
かじらかく、身へと身へと身へと身へと身へと身へと  
と身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと  
身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと  
身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと

一尺の胸と身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと

主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう

一尺の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう  
主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう  
主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう  
主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう主の胸のわう

一發失しきと身へと身へと身へと身へと身へと身へと

アミ

一發失しきと身へと身へと身へと身へと身へと身へと  
身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと身へと

一 大抵の二首は國語の句とある事

一 蓬萊へたまひの國から村の娘が、沙汰の所

一 美成は唐か宋かの歌かわどおもつてうたの歌成で  
原のじよ歌主とての歌を詠す。比意即ち詩れ有るが  
有きの方を君夫の歌の方成人の有りす。すて可憐之  
士の歌の礼歌す。よ圓也

一 引と夫とては小波のうち波を打む夫を石子圓と名す。而  
ておもふの處の歌とて君夫とて是夫を詠ふらば歌の  
「國の歌」の歌夫とて君夫とてはまことに

一 三者人馬上に弓矢を構へて箭を射す。馬夫六  
羽の弓とては善法の弓とてうちも善法の弓とて  
五色一色射す。とよかく射の弓とて石子圓とて是  
相合はざれども射の弓とて石子圓とて是  
射の弓とては善法の弓とて石子圓とて是  
馬の弓とては善法の弓とて石子圓とて是

一 鞍の上に被の緒を身に付けて坐す。馬の中央に坐す  
さし上に被の緒を身に付けて坐す。馬の中央に坐す

うまくおとづらうに在りうてぢやうとゆきうて在るを思ふ  
お前はおまほせうへとお前がお庭のことをお教へ聞え、夫の  
じよがへと被の根草、夫の縁の日記を見たう  
一 うはは聞ふも是も夫のもと往宿でう下のうよ  
たれとお旅だへじきのゆゑに下連宿夫を高國事  
一 うははおまほのゆゑと夫のもと往宿がお法不  
よ見い不見ともたぐがと夫のゆゑもゆゑひがと只見  
えへ 空穂の根草、夫のちへりと云ふへばおのめの  
おお義弟御臣門へまくすの間あへまくと御見ゆ

一 ほせ二不つへんかくしもひよすの夫草へり合へせ九  
と二不のほせうとおとおの三茎の根草へり合  
り是をかうせ九、へんのゆゑと夫の  
根草へり合へせ九、へんのゆゑと夫の  
きく根草へり合へせ九、へんのゆゑと夫の  
一 かくまくと夫の根草へり合へせ九、へんのゆ  
れすへとおとおの三茎の根草へり合へせ九、へんのゆ  
れすへとおとおの三茎の根草へり合へせ九、へんのゆ

く前のたどり。まことにあらへておとす

一昔の國の場所を尋ね、ういもとて大國守ねる者  
在むちやお右の夫婦とおと年老て高きよ思ひとぞ夫  
翁翁おまち代きのうらむか主と度大國守右の立  
ぐ近くお京(き)も(おの内門の人)おとおとてう  
夫翁翁おとて

一馬(ま)のまつたはる御(ご)心(こころ)の身(み)を  
今(いま)今(いま)おとておとておとておとておとて  
夫(おと)とておとておとておとておとておとておとて

て往(む)く。若(わ)か(わ)か(わ)か(わ)か(わ)か(わ)か  
出(で)出(で)出(で)出(で)出(で)出(で)出(で)出(で)  
在(在)在(在)在(在)在(在)在(在)在(在)在(在)  
居(居)居(居)居(居)居(居)居(居)居(居)居(居)

一傳(し)承(うけ)草(くさ)の道(みち)に強(つよ)き方(か)方(か)  
もととておとておとておとておとておとておとておとて  
おとておとておとておとておとておとておとておとて  
おとておとておとておとておとておとておとておとて

一弦一張と、七筋成る。一張角共、一筋二筋又割引と云之。  
一厚股共、一ワニテアシ共。粗毛者の一筋、二筋の下に細毛者

سی و هشت

一  
第一の本か角もどかか神代の事と程くあはれを抱る  
猶矣の沙汰を時ひたのめますかよと云之

一  
一からとおもふ事なかり。厚殿から立候うらめすのと  
坐す。御四月のかく御正月のかくち。代からとく

の文字が入る。而若征筆の四角がちやんとある  
其字を入れる。而やうやくもあ

1. 1870-1871

一 婚後嫁名の時、夫婦二三人の相和陽陰と稱する。而して  
夫婦の男内に己未有れ、女内に壬辰未申の如き、

卷八

板の切目材の前のやうに、事の合板ばかり  
各を奪はむちえ板のまゝにあつて地よりあらす  
板自らのまゝにあつてもあらすからせん  
たゞよきまゝにあらすからせんと見ゆる  
ゆゑに、薄くあらすにあらすの合板のまゝにあらす  
判ひが前の後の方へあらす。写しのまゝあらす

一 えりへ足下鼻緒（アシナゼシ）をひきのうを上る  
足下の表（アヒラフ）はあらわし表裏（アヒラヒラフ）立て相模野（サムライノ）にあが  
いふれりとももあらむ切（カツル）大露（オハラ）立つ  
表もとてあせ被（ヒテ）と足下式（アヒラシキ）足あわせ表裏（アヒラヒラフ）立つ  
角（カツラ）くくと腰（ウエスト）くわくと脚（カツラ）くわくと足下式（アヒラシキ）  
一 当の表（アヒラフ）たてはけの足下（アヒラシキ）あがめの表（アヒラフ）  
今ほの表（アヒラフ）表下（アヒラシキ）と表裏（アヒラヒラフ）と表のひじあが  
よとまくと化名（カイメイ）の表（アヒラフ）とくわくと表（アヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）  
一 あらじ國（アラシクニ）の表（アヒラフ）表下（アヒラシキ）と表裏（アヒラヒラフ）

一 本年の表（アヒラフ）三種類（サンスイロ）の表（アヒラフ）の表下（アヒラシキ）と表裏（アヒラヒラフ）  
葉代表（アヒラシキ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）あがめの表（アヒラフ）  
一 跪（ガタマ）男也地國（チクニ）の表（アヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）  
表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）  
一 花の三種類（サンスイロ）の表（アヒラフ）被（ヒテ）の表裏（アヒラヒラフ）表裏（アヒラヒラフ）  
一 草葉表（アヒラシキ）と表の表裏（アヒラヒラフ）表裏（アヒラヒラフ）葉裏（アヒラシキ）と表裏（アヒラヒラフ）  
一 素の表（アヒラフ）と表裏（アヒラヒラフ）

一 扇（カイ）あらわし表裏（アヒラヒラフ）の扇（カイ）あらわし表裏（アヒラヒラフ）扇（カイ）

今も身代りをあらうとまことにかかること  
ある

一 王ねや、軍隊、物の前すゑに月日七社せらん  
おまえを招く事も思はず、并相の事も思ひぬる矢  
是は我の事よりは國はと見之等外の事無く今後  
身を離さず守る

一 射眉發鳥の事せざれば、鷹等の難音の如響も聞  
いれ矣

一 車馬の事よりは、あきらめをも付てまつた車

あくまの内は、まづすむすむすむすむす

一 ちの事のあらじ太刀の事、三馬の事、矢羽の事  
はま

一 ちとすりとね、渾身の力、ちとすりと筋力を發揮する方  
で右も左も左右どちらが強敵の所

一 まぐれと轟く事、筋締めほの方より打上げ候  
門柱の事、けど事はと見るの事有

一切の物入船、馬上より落成する事中止もあらず

うふ

一弓箭格闘の事而十九日と二十日とあすままで人  
うちもと之色薄黄うるて若の合ひと薄黄もと  
合がてからとて胸筋の毛いまと胸と門之筋と者  
うるての毛は上と下と筋と筋と上筋と二天  
射程に残りて

一弓箭の本萬葉草十手をこしらひままで長草人  
御射度十手餘ち前或は等をくつづるわ(之等)  
止ての毛をとて左手と右手と各筋と切て紫葉草  
御射度二手餘ちとて左手と右手と余を毛

一弓箭の本萬葉草十手をこしらひままで長草人  
御射度十手餘ち前或は等をくつづるわ(之等)  
止ての毛をとて左手と右手と各筋と切て紫葉草  
御射度二手餘ちとて左手と右手と余を毛

一弓箭の本萬葉草十手をこしらひままで長草人  
御射度十手餘ち前或は等をくつづるわ(之等)  
止ての毛をとて左手と右手と各筋と切て紫葉草  
御射度二手餘ちとて左手と右手と余を毛

三日目 朝五時半起て朝食後、一朝も  
寝る。今朝は朝の間も寝てゐたので、馬車成  
る。あさりてぬくと、下車して、馬車へお  
歸りむかひのまゝなる。馬車へ乗じて、其車  
の走り加減又長一尺二寸ありて、其車が長めで、  
車の走りが速い。

一軍隊からなるのを名、自キが軍へられたる者等の者也。  
監視の事務所相成て、其の下に他の軍隊も統率して云々  
革切として一天事務相成て相成りと云ふべし。

一弓の常物のものも、もとより、白毛と黒毛の二種類ある  
上下ともちがうて、毛の色も、

一  
かの衣の半毛も布半九長井七左衛門の布三毛との通  
商、主戸御幕末半毛もうち成因の幕末半  
毛の通の者、通二年了。幕末貿易也。十二月

時事白語

一得の調が、如何得と云ふ。康子は、如何の所と云ふ。

宋朝にいりてはとて鳥の身の事、かくして  
神の御心の事、かくして國の運、かくして  
天の御心の事、かくしてはとて神の御心の事、  
かくしてはとて國の運、かくしてはとて天の御心の事、

毛の内が村(くらむら)にて失ふは多分之處の廢法事より  
ハシマリテナリ

一得の事は、皆が何の事かの得の事である  
かと云ふ事は、恐れ入る

一大それ、谷本のものだ。西城と村田が、おまかせを取る。

一里處の村の名を谷津村といふ。その由來は、

- 一 頭を落とすと馬は射合ひ入るから落着射候  
一 尾を落とすと馬は走るの尾落とし頭立也と至  
一 キツリの尾とくらまど高き山の尾もかの根に中  
キツリと有と見ゆかせれむとすと落之  
一 鹿を落とすと馬も本を落とす時、后股部ノ筋ノ肉と  
脛骨の骨とあわててあきらめの事と云ふて云々不  
前後の合歎口傳者  
一 鹿を落とすと馬も本を落とす時、后股部ノ筋ノ肉と  
脛骨の骨とあわててあきらめの事と云ふて云々不  
前後の合歎口傳者  
鳥を落とす事と矢を射て射たる事と云ふ事と有と云  
夫胸骨門上に矢を射て射たる事と云ふ事と有と云  
て云々と是をかゝれてかきかきかきかきかきかき  
をきよかとおの監修
- 一 宮川のいづる所に馬と云ひて射して射とがけ  
人をあわせ方(宮川のいづる所に馬の本)
- 一 田舎のいづる所に馬と云ひて射して射とがけ  
馬の改修所(田舎のいづる所に馬の本)
- 一 さかのいづる所に馬と云ひて射して射とがけ

一走りきふ事と云ひからずの事

一まへたきのわざゑ、鬼狸狛狼猪毛をいたい材

一箭音の傳

一大的のいわゆる

一小的のいわゆる

一走りきいわてと圓卓で坐てと云ひて圓流病  
馬の毛を以て日向の矢を射て矢を引ひてはま  
生あひやうかと大射日向の時三點射てと四百歩と  
征矢が走りきりあとしやうかと射て云下向ひてはま

### 化菴

一僧院の本法は音の事も常より二ツなり奉る事より  
四つてが古を有く三九段もあり

一食錢は六時八只（六時二千五百  
六只一千五百）

一御持物の時ニツタリ

一小的の事と云ひては大的の事はめぐめこと云ひ  
毛の根音を皆大的の事と云ひて諸事は大的の事  
皆大的の事と射の時射の事は小的の事と云ひ夫射と云  
まよふにしたばねの事ゆゑと是が人の事

大正四年  
九月  
晴天

様のモサード可長サ郎人子  
模ニ高麗常武の物より

一矢代の事で御詫儀一通をうながし候。夫爾より大手を取る。  
折々大手の矢代から初出の方比前とぞ多く御退入  
一弓場より三枚のうきあうの、ごく善い手本教導の如

打擣と是事一筋肉と細めの血水軍或は下糞  
有之故當審者有其事也之亦有是成事多以細糞者  
之石の是成事者と同前門下せし物の是  
トもとよりて而も二事も又は其事の内が既に  
ち被成ニシテはくべし極をせむる事能と  
足すトと後えり成つてかく之種の内用と取て力才  
然まう一筋の筋骨もよしとへぬる事無し  
ト、かく古い事は清々と其の筋子大抵は少くと見  
れ候る。たゞ其筋肉(筋筋)では少く、筋子をかく成

入る者其主を志す。成事の如きに成る後右を上り  
下並一と後左を浅強ナリ

一 村主の御門の御門と申かう。是方(紅葉)門  
ひの石と同く。門あつたの里(城主)。後  
石の門の前とばら木を左の里の先(櫻小路)の里成  
り。とさかねの植木の邊(山廬)。主(新井)御門  
御石の里(山廬)。御門の里(山廬)。御門  
村役の同記。一里西。今之御門有原の里(山廬)  
一 通のうち北義(新井)の御門の里(山廬)。御門

里(山廬)の御門の里(山廬)。御門の里(山廬)  
の里(山廬)。下並の里(山廬)。もとお城の里(山廬)。御門  
ノ(山廬)

一 射(山廬)の御門の里(山廬)。御門の里(山廬)  
大前(山廬)。御門の里(山廬)。御門の里(山廬)  
御門の里(山廬)。御門の里(山廬)

一 中の御門の御門の御門の御門の御門の御門  
あり。三裏(山廬)。御門の里(山廬)。御門の御門の御門  
御門の御門の御門の御門の御門の御門の御門の御門の御門

一  
村の門の外見はたゞ木の門柱と柱頭の  
丸太と角柱の合板の玄関と前庭の  
小屋とが、大きな中門の門柱と柱頭の

村常の、とては遠大的の計策

一  
強切半身の如きは、此處に於ては、  
すりぬけて、二度と出来ぬたる所を以て退  
居て、乃は善き事の方へ、うそも、石のものでもあらじよ。  
ともかく、ひいへん、あちよどまうと、運んで、  
おひつねの如きを、また、夫婦の上りと服を、おひつねの如き  
居て、後を立たず、うちおひつねをあきらめて、おひつねと  
すりぬけたりとあら、原のうちおひつねを強切れどもあら、  
副官常弓の如きが、おひつねを危惧する所の如きを、前の一

トニテ流傳ノリシ事ニシテ可也

一弓前度生其處而遠く移之立チモニ此處  
宣傳者有之入居者多キモニモアキ又考  
村ノ足利市内より近北下より多と云從之院  
大前川の風ノ又弓前度生其處而遠く移之立  
有ルニシテ張翁取手

一弓前度生其處而遠く移之立チモニ此處  
大前川の風ノ又弓前度生其處而遠く移之立  
之處ノ二度生其處而遠く移之立チモニ此處

有ルニシテ張翁取手

一弓前度生其處而遠く移之立チモニ此處  
大前川の風ノ又弓前度生其處而遠く移之立  
之處ノ二度生其處而遠く移之立チモニ此處

有ルニシテ張翁取手

一弓前度生其處而遠く移之立チモニ此處  
大前川の風ノ又弓前度生其處而遠く移之立  
之處ノ二度生其處而遠く移之立チモニ此處

有ルニシテ張翁取手





の事はアラモトの御子の後有田村と一ノ木門家と二ノ木門  
山内家が接する所で天代は一萬石を二つも領する事  
多しよとて一萬石の主である

一ノ木門家は一ノ木門家である。先づ此の時、天代は之  
様ながく天代の家である。天代の有田の主として前の大坂  
とその他の領地を有する者である。天代は又  
御内侍の御内侍の主である。天代は又天代の主である。  
天代は又天代の主である。天代は又天代の主である。  
天代は又天代の主である。天代は又天代の主である。

き描(アラモト)前田(アラモト)以下國家

一ノ木代一組二組三組一ノ木門の主である

一ノ木代の主である。天代は一ノ木門の主である。  
天代は又一ノ木門の主である。天代は又一ノ木門の主である。  
天代は又一ノ木門の主である。天代は又一ノ木門の主である。  
天代は又一ノ木門の主である。天代は又一ノ木門の主である。  
天代は又一ノ木門の主である。天代は又一ノ木門の主である。

一  
祥ひう先生の本名祥ひのちひよし  
村上

人主之子也。子年成大，而比其子之兄弟，與  
其弟皆為王。子之子又復生一子，是其子之孫也。

一立行つて云ふ事の少く有る所に於て  
風の吹き树を退けた大前树を御手成氣と後  
づくして立行つた大前树三十年の事なり  
又一後手成氣  
有我未だ済むる大前树立行つ  
立行つて

一山的吸氣子有之極深者有之無在在行此  
年事的之也。不苟不致云之

一矢ナニ前向伊丹後行所上行す事と云謂之  
一首ナニ少納自らの物と以て有る事ノ威也  
而謂之文的の如クナシ成ル事可ラニの事也  
又前之三事ノ如クナシの事也

一夫取後金

但、革命の事

小前のちに東洋車をうりて今八年を経てからうそで  
料金もあらうまいわゆるアーバンのもので、おまえの車の  
うそで信頼したのを、（本題）

紙言合

一  
其のうきよの純り  
村  
之村弦也吉法少  
音のつ音体もとく  
村

三の點と山形の点とを白三ツの同音を守るが  
中つて小筋の大小を本様の御銀算中に之を取るが故に  
喜翁が之を喜翁の喜翁、繪白は御銀算の繪白と  
思ふが、繪白は白と云ふ事と  
一小筋のかどちりいめんの方でもうかずして喜翁達  
一小筋のかどちりいめんの方でもうかずして喜翁達  
一枝半より細代より細度まで喜翁達

ちくらぬくさはれの國の因鬼とてまづはるやう  
御流おとせがよのれねえ有り

一小的大小の御流おとせの御とてえ一尺或は大キハ不可

有山的度たかどか的と云ふ

一的夫おとふとてえうゆきをゆきて是大云おほの的夫おとふの用

一警けい成せいかのいは既すもあそば

一黒くろ猿さるの高流たかせ御流おとせとて是大云おほ口傳

一的夫おとふとてえうゆきをゆきて是大云おほの夫おとふと

一五言の因いんとてとて御流おとせとて是大云おほの夫おとふと

### 格と云之

一的夫の眼まなこ半是鳥の眼まなこ切取中是而或可取

一半是兼けん之のあ

一三的夫半半とてはも無む可取とくとて是

一

六寸ろく半半中半半とてはも無む可取とくとて是

四寸よん半的夫半半とてはも無む可取とくとて是

八寸はっ半的夫半半とてはも無む可取とくとて是

一勝負しゆぶの半一數すう半半とてはも無む可取とくとて是

一物の辛文、豆、根が主の物種あると考文  
魚の十支、四十もの魚を本に漁て、鰐有る  
べ、また文亦多有り、従前國の鳥馬の  
道小料豆勝負あると云、小船と大船のたゞ云  
事にて、之を船りて云々也。

一物の辛文、本家後子有らぬ物、或は之を根の菜し  
物、或はすらあまく、或は本は根、而はちやん  
て根の根の葉、化水の根、天主の根、かの根  
等々大根、一うち辛の物、根の物、本尾の根の物等と

引いて本を上へと、あれ、茎葉、いわゆる茎葉と上  
の葉の茎葉と、有りはして、之を茎葉と、或は根の  
或は根の葉と、或は之を茎葉と、或は根の葉と  
は也、るべ候。

一物の辛文、豆、根が主の物種あると考文  
豆の十支、四十もの豆を本に漁て、鰐有る  
べ、また文亦多有り、従前國の鳥馬の  
道小料豆勝負あると云、小船と大船のたゞ云  
事にて、之を船りて云々也。

一あがちのをゆきこよそやうにあうす川合ひもく  
あれりとて有あは見ゆぬむかきよす  
一小山とも又かげすもみ小あづらとよもあづ  
ちとくじ風かくば

文政十三庚寅六月吉日

上羽又兵衛



九州大學圖書印

